

## テノールの超高音「Hi-C」

テノールの音域は厳しく、年齢を重ねても維持をすることは確かに難しいことで、マリオ・デル・モナコも、フランコ・コレリも 60 歳で引退しましたし、あのパヴァロッティでさえ、最も、世界的に注目されるトリノオリンピックの開会式で、現在の私の年齢とほぼ同じでしたが、「誰も寝てはならぬ」を“半音下げ”で歌っていました。それだけ、「誰も寝てはならぬ」の最後の「H」にはプレッシャーがあります。2012 年に出版された「日本の演奏家」という本の私の欄には、“[今後の目標] 70 歳台になっても「誰も寝てはならぬ」を原調で歌えること”と書かれていまして、現時点では、その目標を完全に達成出来ています。

さらに高い超高音の「Hi-C」も、以前よりはるかに安定して完璧に歌えるようになって来ています。ヨーロッパで録音された私の CD「誰も寝てはならぬ/ 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」に収録されているオペラアリアでも、「冷たい手を (ラ・ボエーム)」「見よ、恐ろしい炎を (トロヴァトーレ)」「この清らかな住まい (ファウスト)」の 3 曲で「Hi-C」が歌われています。「蝶々夫人」や「ラ・ボエーム」といった有名なオペラでのソプラノとテノールのかなり長い二重唱でも、二重唱の最後は、ソプラノとテノールの長々と伸ばす「Hi-C」で華やかに飾られます。

私は、一般的には「Hi-C」のような超高音を歌うのが困難になってくる年齢になってきましたが、それに反して、最近になり、私は、全身の状態を“このように”保ち、喉周辺の状態を“このように”保てば、確実に「Hi-C」を綺麗に響かせることが出来るということを完全に『体得』することが出来ました。松本美和子先生がおっしゃった「米澤さんの声帯は傷んでないから、あと 30 年は歌えるわよ！」というお言葉を心の支えに、「Hi-C」を歌うオペラアリアはもちろん、全てのオペラアリアを原調で歌い続けたいと心に期しております。幸い、最近受けました、胃・大腸内視鏡検査、全身の CT 検査、脳ドック等々の検診の全てで、まったく“異常なし”でしたので、「あと 30 年」まではちょっと・・・としても、ここしばらくは、十分に歌える心身を持ち得ていると思っています。松本先生は、2018 年に「喜寿記念リサイタル」を東京・紀尾井ホールで開催され、私は「オテロ」の“愛の二重唱”と一緒に歌わせて頂きましたが、最近、5カ国語で歌われた歌曲集の CD を発行され、来年には「傘寿記念リサイタル」を東京・紀尾井ホールで開催されます。要は、師匠の“後追い”をして行けば、自ずと歌い続けられる、と感じておりますし、さらに、上記のように、「Hi-C」のような超高音も「このようにすれば完全に綺麗に響かせることが出来る」ということを体得できましたので、“怖いものなし”で歌ってゆきたいと心に期しています。

(2022 年 3 月 13 日 記)